

○ 帝都銀行根岸支店・中

銃声が響く。

強盗Aの声「動くな！ 全員、その場にしゃがめ！ 言う事聞か
ねえとぶち殺すぞ！」

硬直している行員達。

悲鳴をあげてしゃがみ込む、大勢の客達。

目出し帽をかぶった三人の銀行強盗。

カウンターの前で銃を構えている強盗A。

客達の近くでそれぞれ銃を構えている強盗B・C。

しゃがんでいる客達の中にいる、木村咲子（18）。

咲子（N）「……えー、皆さん初めまして。私は木村咲子と言いま
す。見ての通りですが、私は今、人生最大のピンチで
す。実はこんな目に遭ってるのには、ちょっと理由があ
りまして……」

咲子の前に一人、男が立っている。

ジャージの上下に白衣を着ている、渡辺太郎（35）。

仁王立ちで高笑いする渡。

咲子（N）「理由というか……このクソ男が全ての元凶なんです
けど」

客と行員と強盗達の視線が、渡に集中する。

渡 「芝居がかった口調で）やはり来たな銀行強盗諸君！

佐藤隊員の予知通りだ！ 残念だったね。君達はもうお
終いだ！」

強盗B 「（渡に近づきながら）何だテメエ！ 早くしゃがめコ
ラ！」

渡 「黙れ悪党！ 戦闘開始だ！ 超能力戦隊エスパーズ！

GO！」

咲子（N）「……ごめんなさい」

○ メインタイトル『超能力戦隊エスパーズ』

○ 産琉大学・前 （咲子の回想）

T・『3時間前』

学生達が入りしている大学の正門。
門の前に、『産琉大学入試合格発表会場』と書かれ
た立て札がある。

○ 同・広場

広場の一角の大きな掲示板。
入試合格者の受験番号が書かれた紙が貼りだされ
ている。

咲子「虚ろな表情で」……ない」

咲子の横を、大学職員の腕章をつけた男が通る。

咲子「あの……」

職員「はい？」

咲子「この発表……書き間違いとかないですかね？」

職員「は？ いや、間違いはないですよ」

咲子「(力無く)私、ここ滑り止めなんですよ。いくらなんでも、ここなら通ると思ったんですけど……」

職員「(ムツとして)発表に間違いはないです。あなたが試験
で書いた答えが間違ってたんじゃないですか？」

笑いながら歩き去る職員。
がつくりと肩を落とす咲子。

○ 道

とぼとぼと歩いてくる咲子。

携帯の着信音が鳴り、電話に出る。

咲子「……もしもし」

彼氏の声「おー、咲子。結果どうだった？」

咲子「……」

彼氏の声「何？ 落ちたの？ マジで？ やっぱりなあ。だと思
ったよ」

咲子「……どういう意味？ もう、ひどいよ。今からそっち行

くから」

彼氏の声「あ、ごめん来ないで。ってか本当にごめん。こんな時になんなんだけど、別れて俺と」

咲子「はあ？ 何それ！」

彼氏の声「いや、他に好きな女いるし俺」

咲子「(泣きそうな声で) ちょっと待ってよ。何なの、もう」

彼氏の声「いや、俺もタイミング悪いとは思ってたんだけどさ。でも、嫌な事は一日で全部済ませた方が後で楽だろ？ 本当にごめんな。大学だけが人生じゃないから、これからはもがなばれよ」

切れる電話。

咲子、深く息を吸いこみ、携帯に向かって、

咲子「(大声で) 地獄に堕ちろ！」

携帯を街路樹に投げつける咲子。そのまま大股で歩き始める。

しばらく進んで立ち止まる咲子。戻ってきて、街路樹をガサガサとかき分け始める。

咲子「(泣きながら) くそお……どこだ？」

咲子の後ろに立つ山田優一(18)。

咲子「……あつた！」

携帯を掴んで立ち上がる咲子。背後にいた山田に気づく。

山田のさわやかな笑顔。

咲子「(戸惑って) あ、あの別に怪しいことは何も……」

山田「久しぶりだな、咲子。俺の事、覚えてない？」

咲子「え？ えーつと……」

山田「俺だよ俺。小学校の時に一緒だった山田優一」

咲子「え？ 山チン？ マジすごい久しぶり！ どうしたの山チン、こんなところで？」

山田「いや、ブラブラしてただけだけど。そしたら、植え込みに頭突っ込んでる人がいたから」

咲子「(恥ずかしそうに) やだなあ……いや、あれは携帯落としちゃって」

山田「立ち話もなんだし、どっかで茶でも飲む？」

咲子「おお……捨てるバカより拾う神」

山田「何？」

咲子「何でもない、行こ、山チン」

山田「ごめん、その山チンってのやめて。子供の時のあだ名だから」

歩き出す二人。

○ 喫茶店・全景

○ 同・店内

一角の席で座っている二人。

咲子「……それで、滑り止めなのに滑っちゃってき。もう、これからどうすんだって感じだよ」

山田「そっか。でもまあ、そんな落ち込むなよ。俺なんか高校中退して、今は好きな事やってるけど、毎日楽しいし」

咲子「へえ。いいね、そういうのも。何やってんの？」

山田「あ、それを話す前に……」
山田、ポケットから輪ゴムを出してテーブルに置く。

山田「唐突で悪いんだけど……あれ、やってくれないかな？
輪ゴム切り。小学校の時にみんなの前でやってたやつ」

咲子「え……いや、あれは……」

山田「(さわやかな笑顔で)頼むよ咲子。どうしても見たいんだ」

咲子「まあ……いいけど」

咲子、テーブルの上の輪ゴムを見つめる。
ブチッと千切れる輪ゴム。

山田「おお、すげえ！あのさ、これって種も仕掛けもないんだよな？」

咲子「ないよ。昔から輪ゴムだけは、念じるだけで切れるんだ。皆には手品だって言われたけど」

山田「これって超能力だろ」

咲子「そんないいもんじゃないでしょ。やったの久しぶりだ

よ」

山田「何で？　すごい事だぜ、これ。念力だよ念力」

咲子「だってさ、念力って言ったって輪ゴムしか切れないんだよ。人生で何の役にも立たないって。スプーン曲げより無意味じゃん。だから何か恥ずかしくて、やるの嫌になったの」

渡の声「(大声で) 馬鹿者！」

ビクリと振り向く咲子。

咲子の後ろの席から、身を乗り出している渡。

渡「自分の力が恥ずかしいとは何事かね！　そんな事じゃ超能力戦隊エスパーズの一員にはなれないぞ！」

言いながら、水のコップを持って山田の隣に座る渡。

咲子、訳の分からない表情。

渡「君の力を見せてもらったよ。確かに大した念力だ。ああ申し遅れたね、私はこういう者だ」

一気に話してから、名刺を差し出す渡。

名刺を受け取って見る咲子。

名刺には『超能力戦隊エスパーズ指令官・渡辺太郎』と書かれている。

咲子「わなたべたろう……」

渡「違う。わたりへんたろう、だ」

咲子「(名刺を放り捨てて) すいません、訳が訳が分からないんですけど」

渡「全く察しが悪いな。名刺をちゃんと見たまえ。僕が君を、超能力戦隊エスパーズに入隊させてやると言ってるんだ。分かるだろ？」

咲子「(立ち上がり) ますます分かりません。山チン、この人ちょっとおかしいから、ここ出よ」

山田「(慌てて) 待ってくれよ。話を聞いてくれ咲子」

渡「(笑って) 残念だったね、山田隊員はエスパーズの一人さ」

咲子、愕然とした表情で座り直す。

咲子「……これはもしかして……久しぶりに会った知り合いに

勧誘されるとか、そういう感じの……」

渡 「(憤然と) 違うって」

ウエイトレスが、渡の席にカレーライスを持ってくる。

渡 「来た来た。さてと……君、これを一口食べたまえ」

カレーライスを咲子の前に置く渡。

咲子 「(無然として) ……いや、別にお腹空いてないから」

渡 「一口くらい食えるだろう。いいから食べなさいって。頼むから」

咲子、嫌そうにスプーンを持ち、カレーを一口食べる。

渡 「どうだ？ おいしいか？ ん？」

咲子 「普通ですよ。何なんですか、さつきから。馴れ馴れしいな、もう！」

渡 「(咲子を見つめて) 山田君、やってくれたまえ」

山田、カレーライスを見つめる。

山田 「……終わりました」

渡 「……さあ、もう一口食べるんだ」

咲子、カレーを一口食べ、スプーンを落とす。

咲子 「からっ！ 何これ！ ムチャクチャ辛い！」

水を飲む咲子。

渡 「(笑って) 山田君も君と同じく超能力者なのさ。念じただけでカレーをどこまでも辛くする事が出来るという、世にも珍しい力だ。すごいだろう？」

咲子 「(口を押さえながら) すごくくない！ 何だその力！」

渡 「さあ、僕達エスパーズの秘密本部に案内しよう。これで僕の話聞く気にもなっただろう！」

咲子 「なるわけ無いだろ！ バカか！」

○ アパート・全景

老朽化したアパート。

一階の一室のドア。

『超能力戦隊エスパーズ秘密本部』と貼り紙がし

である。

(続きは、月刊ドラマ「2005年9月号」にて掲載)